

論文の和文要旨

論文題目

保留地におけるカトリック・ミッションの存在と
ラコタ・アイデンティティ形成への影響
—パイン・リッジ保留地のミッション・スクールの事例から—

氏名

鈴木 泰子

本論文は、カトリック教会によって運営されたミッション・スクールが、部族にどのような貢献を果たし、先住民としてのアイデンティティの形成にどのような影響を及ぼしてきたかをサウス・ダコタ州のオグララ・スー部族を例に考察するものである。上に述べた考察を通して、従来否定的な評価が下されがちだった白人（ヨーロッパ圏から北米大陸へ移住してきた非先住民）による先住民教育に、肯定的な側面もあったことを明らかにしたい。

第1章では、合衆国における先住民教育の流れを述べ、先住民に対する白人側の関心が変わるにつれて、先住民教育の政策が変化していった状況を明らかにする。

植民地時代から、白人たちはアメリカ先住民の教育に関心を持っていた。彼らは先住民を無知な野蛮人とみなしていたが、教育を施すことで、白人と同じように文明化させることができると考え、先住民の教育は、白人家庭や、既存の学校制度の中で行われてきた。

1879年、連邦政府が管理する初めてのインディアン寄宿学校として、カーライル実業学校が開校された。設立者のリチャード・ヘンリー・プラットは、南北戦争やインディアン戦争で活躍した軍人だった。インディアン戦争では黒人部隊を指揮し、先住民の捕虜に教育を施した。彼は黒人児童の為の教育機関であったハンプトン農業師範学校を参考に、インディアン児童のための学校を開設した。先住民児童たちは両親や部族から引き離されて、寄宿学校で教育を受けることとなった。プラットの教育方針は、彼自身の言葉を借りれば、「インディアンを殺し、人間を救う」ことにあった。つまり先住民生徒を他の白人と同じような人間に変えることで、アメリカ社会に溶け込ませることを目標とした。

そのためにカーライル実業学校では、先住民のアイデンティティの核となる部族の言語を使うことを固く禁じ、強制的に英語を使わせ、徹底した英語教育を行った。プラットは、先住民児童たちの入学前後の写真や、生徒たちのスポーツや芸術分野での活躍を宣伝したことで、寄宿学校制度は先住民の文明化に効果的だと考えられるようになった。カーライル実業学校では、基礎的な教育の他、職業教育にも力を入れており、校外の白人家庭で働く校外労働も行われた。このようなシステムは他の寄宿学校にも取り入れられ、寄宿学校の特徴の一つとなった。また寄宿学校では軍隊のような厳しい規律が課せられ、反抗

的な態度を取ったりすると様々な懲罰が与えられ、虐待が行われていたとの報告もなされている。

1926年に、内務省はブルッキング研究所に、アメリカインディアンの現状を調査させた。調査をまとめた『メリアム報告書』、正式には「インディアン行政の問題点」が1928年に提出された。報告書では寄宿学校では生徒数が過多で、衛生状態も悪く、食事も劣悪で、生徒の労働によって支えられていると指摘された。このような問題がメリアム報告書によって明らかになると、問題の解決が試みられるようになった。先住民問題は白人の関心を引くことによって、改善が計られる構図を有していた。

第2章では、スー族とカトリック教会との関係、パイン・リッジ保留地にカトリック教会によるミッション・スクールが設立されるまでの経過、及び、そのミッション・スクールが先住民の生徒に施した教育を考察する。キリスト教の各宗派の中で、合衆国ではプロテスタントが優勢であった。しかしカトリック教会は、中南米での先住民への布教の経験を生かして、先住民への布教を行った。カトリック教会の神父たちはラコタ語を覚え、聖なるパイプの儀式など、ラコタ族に伝わる伝統的な儀式にも参加するなど、ラコタ族の文化を尊重した。また聖書や聖歌、祈祷などをラコタ語に訳し、そのことによって、ラコタ語でのミサを可能にした。彼らはラコタ族の宗教儀式や文化的要素の中で、カトリック的な価値に反するものは徹底的に否定したが、カトリックの文脈に沿うものには寛大な姿勢を示した。ラコタ族の宗教的概念や儀式の中で、カトリック教会のものと類似するものがあると、それらをカトリック教会の概念や儀式に転用することで、ラコタ族の人々のカトリック信仰への理解を促した。このようにカトリック教会の神父たちは、ラコタ族の精神世界を尊重する姿勢を取っていたので、ラコタ族に養子として迎えられる者まであらわれた。

ユリシーズ・グラントが1868年に大統領に就任すると、対インディアン平和政策の一環として、インディアン保留地の監督に、各宗派が割り当てられた。パイン・リッジ保留地に割り当てられたのは、カトリック教会ではなく、プロテスタントに属する宗派だった。しかしパイン・リッジ保留地の先住民の代表者であるインディアンのチーフたちは、従来から懇意にしていたカトリック教会による管理を望んだ。彼らはワシントンに招聘された際には、大統領やインディアン問題担当者にカトリック教会への割り当てを訴えた。カトリック教会の方でも、ラコタ族の管理を望み、割り当てに不満だったプロテスタントと協力しパイン・リッジ保留地はカトリック教会の監督下となり、カトリック教会によるミッション・スクールが、1888年にパイン・リッジ保留地に開校した。

ホーリー・ロザリー・ミッション・スクール(HRIS)と名付けられた学校は寄宿学校制で、従来の寄宿学校と同じく先住民の文明化を目的としており、同じような問題も抱えていた。しかし、カーライル実業学校等の保留地を離れた寄宿学校と異なり、保留地内にあったことから、生徒と家族や部族の関係が断ち切られてしまうことはなかった。HRISでも生徒はラコタ語を使うことを禁じられたが、神父たちはラコタ語を習得していたので、

ラコタ語しか理解できない父兄との意志疎通をすることが出来た。また英語がまったくわからない新入の生徒たちにも対応することも可能であった。子どもたちへの教育以外にも、病気や怪我の治療を行い、父兄を学校行事に招待するなど、部族の人々への貢献を果たしていた。HRIS では、このような背景、及び、そのほかの様々な好条件により、カーライル校など居留地と遠く離れた場所にある寄宿学校とは異なった成果を挙げることができた。

3章では、先住民教育の変化がアメリカ社会全体に及ぼした影響を、レッド・クラウド・インディアン・スクールを例に考察した。

寄宿学校で教育を受けた先住民が主導して、先住民の組織が形成され、アメリカ社会へ発言するようになっていった。また第二次世界大戦では、軍隊に入隊し、白人たちと共に生活をした体験によって、先住民自身も変化していった。1960年代に公民権運動がアメリカを席卷すると、先住民も従来の先住民の扱われ方に異議を唱え、積極的に改善を主張し、抗議を行った。

1969年、HRMS は校名をレッド・クラウド・インディアン・スクール (RCIS) と変更した。校名のレッド・クラウドとは、パイン・リッジ保留地のチーフとして、カトリック教会のミッション・スクールの招聘にも大きく貢献した、著名なチーフである。同校は名前を変更すると同時に、授業にラコタ語とラコタ文化や宗教を取り込む試みを始めた。生徒にラコタ語を捨てるよう強制した過去の歴史とは逆に、ラコタ語を話せる話者が減り、先住民家庭で使われなくなってきたラコタ語を、学校で生徒に教えるようになった。また、公立の学校では宗教教育が禁じられているが、RCIS では私立である特徴を生かして、ラコタの宗教についての教育も行っている。このような教育を通して、生徒にラコタとしてのアイデンティティを持たせるよう図っている。

また RCIS は、生徒の全てが卒業後には、高等教育機関に進学することを目標にしている。その目標には達成していないが、学校は卒業生が進学や軍隊への入隊によって、保留地を出て生活することを奨励している。そして保留地外に進学した卒業生が孤立しないよう、彼らと連絡を取り合うトラック・システムを採用し、卒業生をサポートしている。保留地外に進学した卒業生の中には、やがて保留地に戻り、保留地で職を得て、人々に貢献したいと考えている者も多い。しかし現状では、保留地内の就職先は限られており、その実現は難しい。弁護士や医師などの専門職への従事や、保留地での新ビジネスの起業など、今後の変化が期待されている。

RCIS では、生徒はラコタ族としての自覚と自尊心を育てている。保留地に関する外部メディアによる一方的な報道に対して、彼らは批判的だ。これまで、外部メディアがパイン・リッジ保留地取材する際には、保留地の貧困やアル中問題など、ネガティブな側面ばかり強調されるのが常だった。こうした一面的な報道に対して、RCIS の生徒たちは自分たちの見解を表明することで、保留地に対するステレオ・タイプの偏見を崩し、そのことによって保留地への貢献を果たそうとしている。生徒たちは保留地の抱える課題を認

識しつつも、その解決を目指そうとする姿勢を示している。

先住民教育は、先住民の言語や文化を消滅させることで先住民を文明化させようとした時代から、先住民に彼らの言語や文化を取り戻させるためのものへと変化してきた。RCIS では、生徒にラコタ族の文化の根幹である、ラコタ族の伝統的な宗教についても教え、そのことで生徒の民族的自尊心を育もうとしている。RCIS の卒業生には、いったんは保留地の外に出ても、ゆくゆくは保留地に戻り、部族に貢献したいと望む者が多い。一方、部族の人たちも、彼らの活躍に期待している。彼らは、生まれ育った保留地を知っており、しかも保留地外の世界も体験してきたからだ。保留地の改善は、本来、先住民自身によってなされるべきである。RCIS は、その責務を果たしうる人材を育てるための教育を行っている。